

ひきこもり、モラトリアムからの立ち上がり

臨床心理士

榎場 雅子

先月は「ひきこもり、自分さがしのとき」と題して、ひとたび行く手を踏み違えると、本格的「ひきこもり」になりかねない、青年期前期の 2 人の「自分さがしの旅立ち」を紹介しました。

これを継ぎ、「ひきこもり」の代名詞と言われる、「モラトリアム」からの立ち上がりについて、青年期後期の M さんの偽りのない、貴重な体験を教訓として、考えたいと思います。

M さんは 21 歳。同胞 3 人の第 3 子、末っ子長男です。両親は共に医師で、父親は外科医として、母親は内科医として、先代からの「外科内科フレンド医院」を守っています。由緒ありげな名称の由来は、先代が開業の折に「家庭医として、地域との親和性を大切にしたい」との深い思いからのネーミングだったとのことです。その名に恥じず両親とも穏和で、近隣の人たちからも親しまれ、信頼されています。ふたりの姉も、医師の道に進み、長姉はすでに研修医として母校の医局に入局、次姉も同じ大学の医学部に在学中です。ふたりが生家に戻るのは、月に 2～3 回程度とのことで、日頃は両親と M さんの 3 人の生活が常となっています。

M さんは、末っ子長男特有のあまいところはあるが、それがむしろ親しさともなっていました。高校卒業後、当然のように医学部を受験し、これまた当然のように二浪して、医学系受験専門の予備校に通っていました。ところが突然に怠学状態となって、自宅にひきこもってしまいました。両親には、「僕の部屋に入らないで！」と宣言し、ドアには同文の貼り紙をする念の入れようでした。

両親は仕事柄「ひきこもり」について相談されることはあったが、わが身にふりかかってくると為す術もなく、おろおろしながら 3 か月余りが過ぎてしまいました。

しかし、さすがに 3 か月余りも過ぎると、手をこまねているわけにいかず、真剣に相談して、恥も外聞もかなぐり捨てて、父親が大学時代から親交のある、J 先生にありのままを相談しました。J 先生は「今さら言うことではないが、多くの場合、『ひきこもり』そのものは精神疾患ではない。その成り立ちと心的傾向はさまざまだが、これから生活していく上の目標を見失ってしまった、と思われる例が多い。意外なことだが本人はそれを自覚していないか、否定している場合すらある。従って、本人が相談やカウンセリングに足を運ぶことは稀で、多くは親御さんが困ってしまって、相談にみえる。暫くは親御さんに通ってもらい、原因や対策を協議することを手立てとしているが、M 家の場合、M さん本人も家族の背景も、よく承知しているので、手始めとして私（J 先生）が出前相談（訪問治療）してもよい。しかし、それには条件がある。まず、「両親ふたりで相談して、精神科医である J 先生に相談した」と M さんに正直に伝えること。M さんがそのことを受け入れて、M さん自身が希望する場合に限る。と、あくまで M さんの主体性を尊重したものでした。

両親は帰宅するや早々に、そろって M さんの部屋のドアを軽くノックしただけで、反応も待たず、「最近の君の状態が心配で、J 先生に相談してきた。J 先生は、君が希望するなら家まで来て話を聴いてくださると言った」と一気に伝えました。M さんは、静かに部屋から出てきて、「J 先生は僕も好きだから、僕から電話するよ」と言い、さっそく実行しました。J 先生は喜んで受け入れ、M 家への出前相談（J 先生表現）の運びとなりました。まさに啐啄同時のタイミングでした。

J先生によるMさん宅の「出前相談」は、家族療法の名を借りて、リビングで開始されました。序週を終えて、J先生から出された課題は、「夢」と題する短歌を各自が一首ずつ詠むことでした。「詠む」と言われて、3人は密かに五七五七七と、指を折りつつ、優雅に仕上げました。

- ・父親の作 : マウンドで 力投続ける 我なりき 夢より覚めて 右腕うづく
- ・母親の作 : 家族らと 富士に佇つ夢 七合目 遅れる我に 夫が手を貸す
- ・Mさんの作 : 森の中を さまよう夢より 醒めてのち ドラマの「続く」に 似ると思うも

これを受けてJ先生の司会によって、互いに作品を披露して、時ならぬ家族歌会となりました。好評だったのは、お母さんの作品でした。「家族を愛し、ひかえめな人柄がにじみ出ている」と、お父さんが手放しで褒め、Mさんも大きく頷き、賛意を表しました。お父さんの作品については、Mさんが唐突に「お父さんは高校時代は野球健児だったんだね」と、今さらながらに感心し明るく、お母さんは、「腱鞘炎は大丈夫ですか」と心配して、作品鑑賞には至らず、終わってしまいました。Mさんの作品については、両親ともに内なる心情が窺えるからこそ、互いに口を切ることができず、顔を見合わせていました。

J先生は、その心象を察知し、「Mさんの夢は内なる心の迷い、心模様をそのまま示している。順調に育ってきた子ども時代から大人（成人）になるための、「自分の生き方を見つけ出す課題」心の迷いが、「森の中でさまよう」形で夢となって表れたと思われる。まさに『モラトリアム』の心情そのものだと言ってよい。」と、専門家ならではの綿密な夢分析をした後に、言葉を続けて、「歌の結句、“ドラマの「続く」に似ると思うも”をずばり“ドラマの「続く」と我は思うも”としてはどうか。「続く」に似るでは、テレビドラマなどに見られる、視聴率を高めるための製作者の意図が働いたものに似る、ということになってしまう。“ドラマの「続く」と我は思うも”なら、自分で見た夢を自分のこととして捉え、考えていることになるのではないか、と言いました。

Mさんは、居住まいを正して、「実は『嫌な夢を見たものだ』と思い、続きが見たくて二度寝をしたけれど、思うにまかせず、宿題を果たすだけのものになってしまいました。先生のお話を聞いて、ひとつひとつが胸に響きました。ありがとうございました。」とお礼を言いました。

J先生の「出前相談」は、この日を以って終了しました。それから6か月を経て、Mさんの姿は、医学系受験予備校にありました。そして言いました。「これが僕が選んだ僕のドラマの続きです。更に、「このドラマの主題、『ひきこもり、モラトリアムからの立ち上がり』は、『大人になるための猶予期間』に加えて『わが人生、何をしたいか』から、『わが人生、何を求めて生きるか』という、発想の転換を求められているのだ、と、熱っぽく語るのです。

〈市民のまなざし〉 ★この短い物語をどう読みますか。2人の姉に比べて、自分だけが挫折感に苛まれる毎日。息子の悩みを自分の問題と受け止め、恥を忍んで専門医に相談する父母の愛と夫婦の絆。本人の自主性を強調する名医の助言。★自分の経験を糧として、この若者もきっと信頼される家庭医の道を歩み始めることでしょうか。★岩手の中学生の悲報に接しました。いくら救いを求めても誰も真剣に受け止めてくれない、と悟ったときの無力感。担任教師の未熟さばかりが取り沙汰されますが、家庭の扶養義務や学校のいじめの未然防止体制はどうなのでしょう。★元少年Aの「更生」に疑問の声があがる中、1年前に長崎で猟奇的な殺人事件を起こした元女子高校生が医療少年院に移されます。治療や矯正の機会は何度もあったが、monster-parents がいつもその芽を摘んでいたと言う。★思春期というのはすざまじい時期であり、心の深層においては嵐が吹き荒れるのである。管理された「よい子」はこの嵐に耐える力をもたず、その為すがままになって暴力をふるってしまうことになる。…みずから抑制者として子どもの前に立ちだかる義務を放棄する大人が多いが、子どもたちの悩みを正面から受け止めてこそ、そこに真の理解が生まれる。…壁の中に血が通っているのを感じ取るからこそ、若者たちも、一見妨害者として立つわれわれの存在を許容し、暴発するエネルギーを建設的方向へと向けることが出来るのである(河合隼雄)。常識人の言葉が胸に迫ります(h)。